

厚労科研 辻井班（発達研修開発）

2) 1. 適応行動と

Vineland-II（ヴァインランド ツー）適応行動尺度

帝京大学文学部心理学科

黒田 美保

適応行動とは？

Q1. 適応行動とは？不適応行動とは？

適応行動

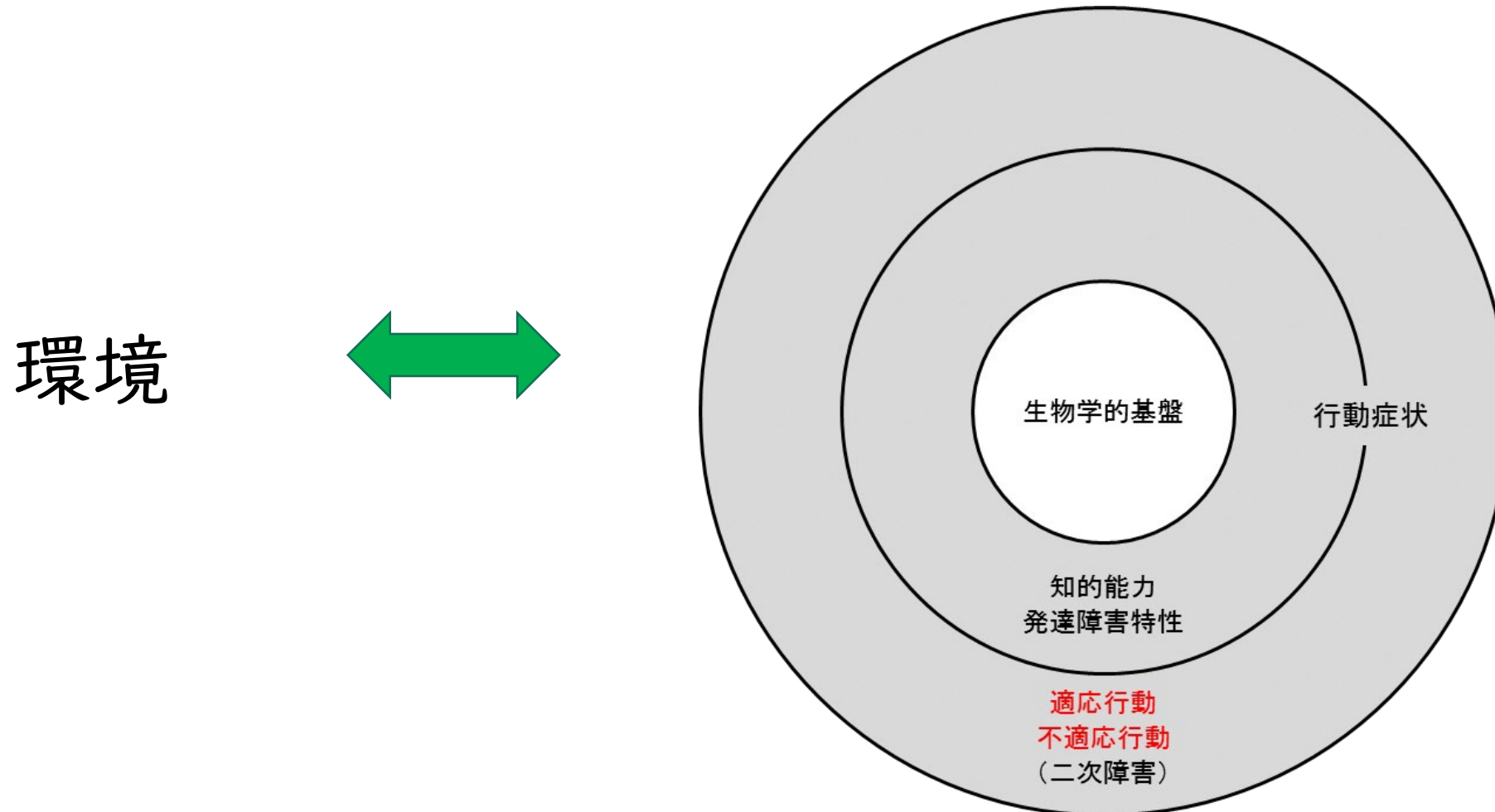
- ・ 社会的、職業的、または他の重要な領域において、機能的・自立的に行動すること。
- ・ 日常生活を安全かつ自立的に送るために必要となる年齢相応のスキル
- ・ 具体的には、食事、身だしなみ、掃除、お金の管理、仕事、友人関係、社会的スキルなど

不適応行動

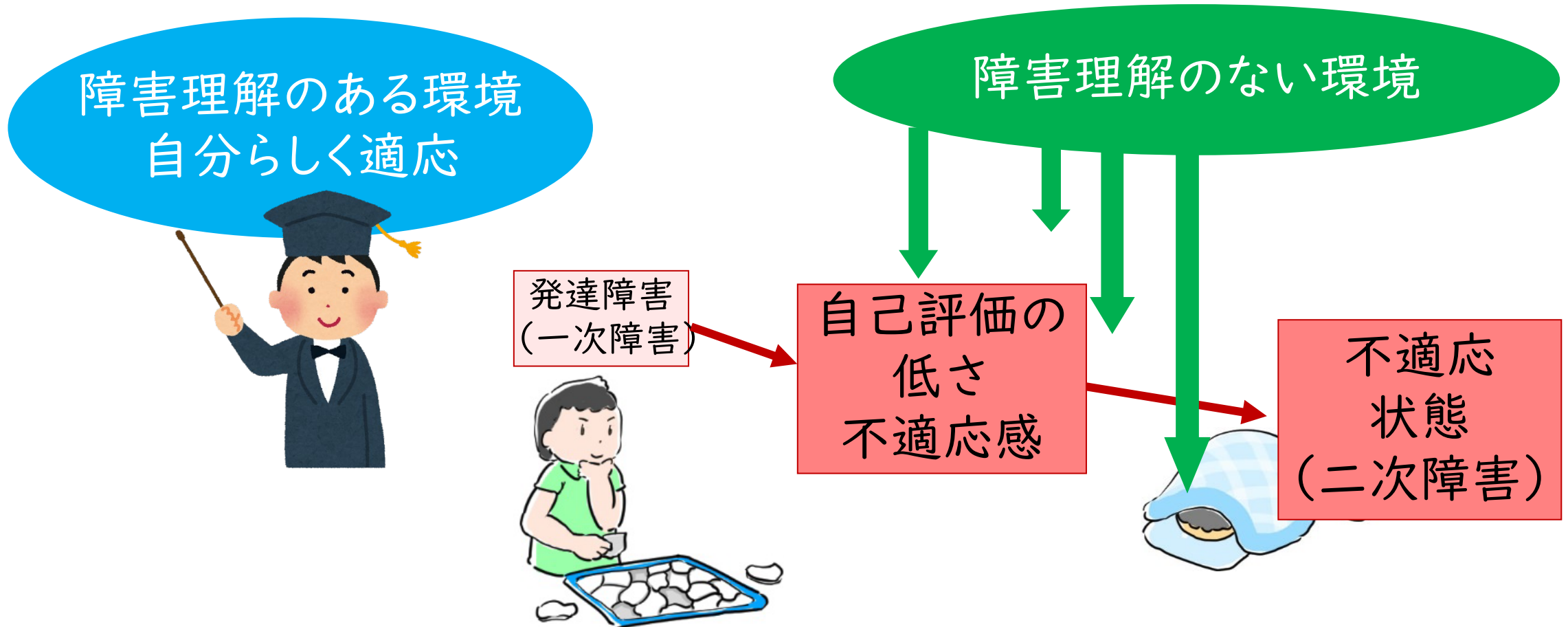
- ・ ストレスへの不適切な対処行動として表れ、非機能的・非生産的な結果をもたらす行動
- ・ 自傷、引きこもりなどの内在化問題と攻撃、非行、犯罪などの外在化問題

適応行動と不適応行動：

生物学的基盤に基づく行動症状がそのまま適応・不適応となるのではない。環境との相互作用。



例えば、自閉スペクトラム症の子



Q 2 :



今までも、学校などの教育機関・医療機関などでは知能検査をして知能指数（IQ）を調べてきました。



なぜ、それだけでは不十分なのでしょうか？

適応行動と知的機能や知能検査の関係

- 知能検査は、知能や知的な領域の認知特徴を調べるものであって、日常生活における行動を調べるものではない（そもそも調べることができない）。
- 現在、知能検査の下位尺度の凸凹から発達障害かどうかを判断するような間違った使い方も散見される。

⇒ については症状の把握を行うべきであり、支援に必要な情報は学業なら学業、適応状況であれば適応行動から把握すべきである。

知的機能と適応行動は異なる

知的機能

- 見る、聞く、話す、覚える、考える、など
- 情報処理能力

適応行動

- セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など
- 環境におけるニーズを自己調整するスキル

適応行動と発達特性

発達特性を調べる検査との関係

- 自閉スペクトラム症:ADI-RやADOS等が診断・評価のゴールドスタンダードとされ、わが国でもスクリーニング的な意味でPARS-TRなどが実施されている。しかし、検査で示される重症度が適応状況に直結するわけではない(Klin etc.)
- ADHDの検査であるADHD-RSやCAARSなどのスクリーニングやConners-3、CAADIDも同じことが言える。SLDの検査でも同じ。

⇒発達特性やその重症度が、適応にそのまま反映するわけではない。
やはり適応行動の検査が必要。

アセスメントから支援へ

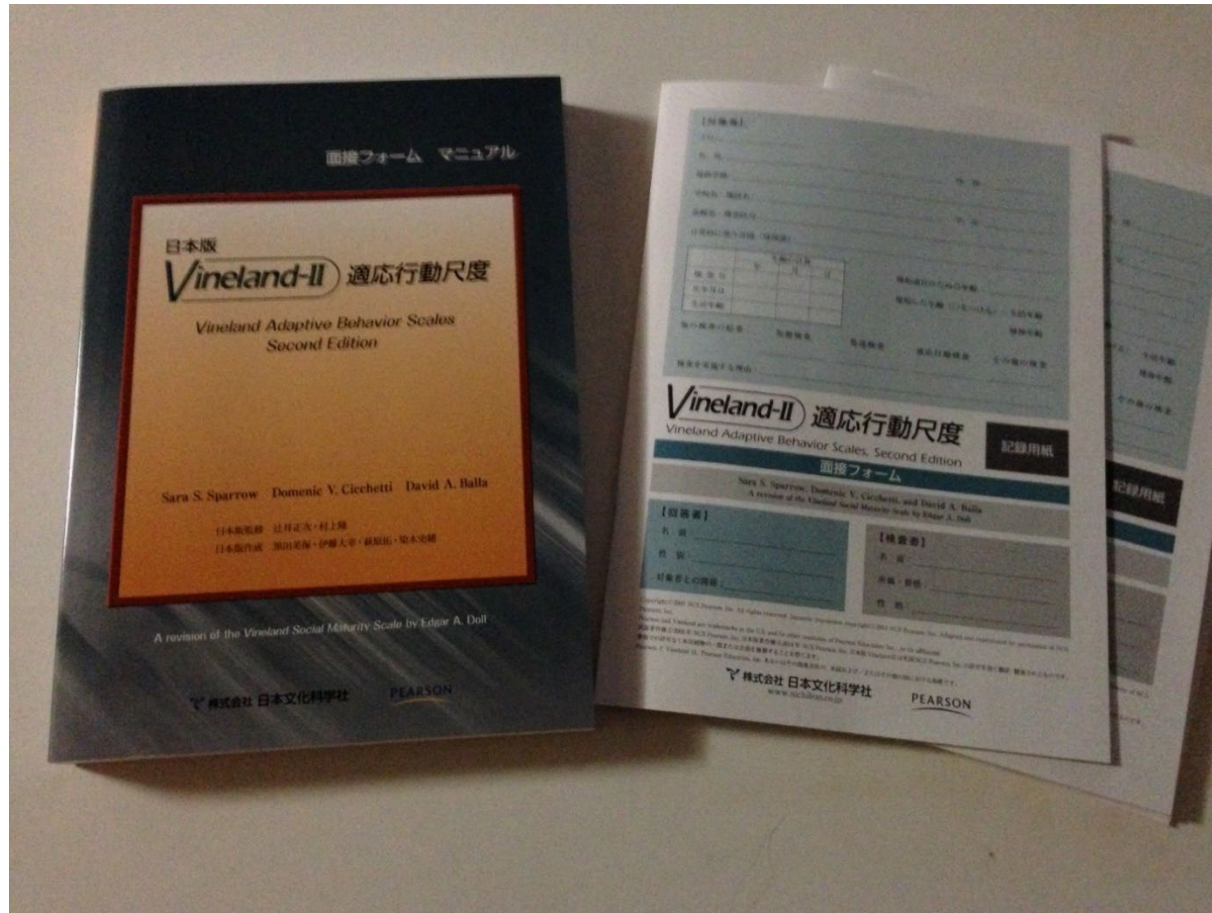
- 知的障害や発達障害の場合、医療機関でできることはあまりない（診断と二次障害への薬物療法やADHDへの薬物療法など）。
- 実際の支援は、保育・教育・福祉のなかでの日常的な行動上の支援が主体となる。それらの異なる分野を通じた共通言語を、客観的にどう位置付けるのかが重要。
- 適応行動による把握は、実際に何がどのくらいできているのかを把握することなので、そのまま支援につなげることができ、異分野との**共通言語**になりうる。

日本における適応行動のアセスメント

- 日本では発達障害児者の臨床・研究において適応行動を評価する習慣が根づいておらず、知能検査や性格検査によるアセスメントが主流となってきた。
 - 適応行動についての尺度は数少なく、全年齢に利用可能な尺度は開発されてこなかった。
 - **新版S-M社会生活能力検査(三木、1980)(改訂:上野・名越、2016):1~13歳**
 - **ASA旭出式社会適応スキル検査(肥田野、2012):幼稚園~高校**
- 不適応行動の評価にはCBCL、SDQ、ABC-Jなどの質問紙尺度が利用されているが、面接形式で信頼性・妥当性の確認された尺度はない。

Vineland-II適應行動尺度

日本版Vineland-II (ヴァインランド) 適応行動尺度



日本文化科学社「日本版Vineland-II
適応行動尺度」
マニュアル、記録用紙の画像
日本文化科学社より許可を得て掲載

Vineland適応行動尺度第二版 (Vineland-II)

- Vineland適応行動尺度(VABS; Sparrow、Balla & Cicchetti、1984)の改訂版としてSparrow、Cicchetti & Balla (2005)によって開発された
- 適応行動の代表的なアセスメントツールとして、国際的に広く利用されている
- 0歳から92歳までの対象に利用できる
- 不適応行動も調べられる
- 用途
 - 知的障害や発達障害の**医学的診断の補助**
 - **介入**や**特別支援教育**などの必要性の判定
 - **介入計画**や**教育方針**の策定・実施後の**効果判定**
 - 知的障害、発達障害、精神疾患、乳幼児の発達などの**研究**

Vineland-IIでの適応行動評価

適応行動: 個人的・社会的充足を満たすのに必要な日常生活における行動

1. 適応行動は、それぞれの年齢で重要となるものが異なる
2. 適応行動の評価は、個人が関わる環境の期待や基準によって変化する
3. 適応行動は、環境の影響および支援効果などによって変容する
4. 適応行動の評価は、**行動**そのものを評価するものであり、**個人の可能性を評価しない**

適応行動
総合点

領域	下位領域	
コミュニケーション領域	受容言語	3歳～
	表出言語	
	読み書き	
日常生活スキル領域	身辺自立	1歳～
	家事	1歳～
	地域生活	
社会性領域	対人関係	1歳～
	遊びと余暇	
	コーピングスキル	
運動スキル領域 ～6歳、50歳～	粗大運動	
	微細運動	
不適応行動 オプション3歳～	内在化問題	
	外在化問題	
	その他	
	不適応行動重要事項	

不適応
行動指標

Vineland-IIの構成

- 適応行動(385項目)
 - コミュニケーション領域(99項目)
 - 受容言語:他者の話に注意を向ける、聞く、理解する
 - 表出言語:話し言葉で意思を伝える
 - 読み書き:文字や文章を読む、書く(3歳以上)
 - 日常生活スキル領域(111項目)
 - 身辺自立:食事、衣服の着脱、衛生に関する行動
 - 家事:手伝い、家事
 - 地域生活:時間、お金、電話、コンピュータなどの管理と使用

Vineland-IIの構成

- 適応行動 (つづき)
 - **社会性**領域 (99項目)
 - 対人関係: 他者との関わり方
 - 遊びと余暇: 遊び、余暇の過ごし方
 - コーピングスキル: 他者に対する責任感や気配り
 - **運動スキル**領域 (76項目; 0-6歳と50歳以上のみ)
 - 粗大運動: 腕や脚を使った大きい運動
 - 微細運動: 手や指を使った細かい運動
- 不適応行動 (50項目)
 - **内在化問題**: ストレスを自分自身に向ける不適切な行動
 - **外在化問題**: ストレスを他者に向ける不適切な行動
 - **その他**: 上記以外の不適切な行動
 - **重要事項**: 臨床的に重要で深刻な不適応行動

Vineland-II 適応行動尺度

Vineland Adaptive Behavior Scales, Second Edition

記録用紙

面接フォーム

Sara S. Sparrow, Domenic V. Cicchetti, and David A. Balla

A revision of the *Vineland Social Maturity Scale* by Edgar A. Doll

原著作権 © 2005 年 NCS Pearson, Inc. 日本版著作権 © 2014 年 NCS Pearson, Inc.

日本版 Vineland-II は米国 NCS Pearson, Inc. の許可を得て翻訳・翻案されたものです。

Copyright © 2005 by NCS Pearson, Inc. All rights reserved.

Japanese translation and reproduced by permission of NCS Pearson, Inc.

本印刷の内容、形式を無断で転載または複写すると著作権法に触れますのでご注意ください。

 株式会社 日本文化科学社
www.nichibun.co.jp

 PEARSON

日本文化科学社「日本版Vineland-II適応行動尺度」記録用紙、表紙より改変転載
日本文化科学社より許可を得て転載

検査施行の概要

- 検査用紙：面接調査フォーム記録用紙
- 評価対象者：知的障害、発達障害、精神障害、身体障害、定型発達など制限なし
- 評価対象者適用年齢：0～92歳
- 回答者：親や養育者など対象者をよく知る者
- 検査方式：半構造化面接
- 実施時間：20～60分
- 評価点
 - 2：自立して行っている
 - 1：部分的あるいは時々行っている
 - 0：やっていない の3段階で評定



結果の概要

標準化における統計的処理はWISCやWAISと同じであり、従ってIQと比較することができます。

適応行動総合点：平均 (M) =100、標準偏差 (SD) =15

領域 標準得点：コミュニケーション、日常生活スキル、社会性、運動スキル領域：M=100、SD=15

下位領域 v-評価点：M=15、SD=3

不適応行動領域：不適応行動指標・内在化問題・外在化問題：v-評価点：M=15、SD=3、重要項目：行動の頻度（粗点2、1）、強度（S、M）

適応水準、相当年齢、スタイン、強みと弱み、対比較

知的機能と適応行動

知的機能

- 見る、聞く、話す、覚える、考える、など
- 情報処理能力



Wechsler式
知能検査
(知能検査IQ)

適応行動

- セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など
- 環境におけるニーズを自己調整するスキル



Vineland-II適応行動尺度
(適応行動総合点)

下位領域と領域の得点

下位領域 / 領域	粗点	v評価点 表B.1	領域標準 得点 表B.2	90% 信頼区間 表C.1/C.2	パーセンタイル 順位 表C.3	適応水準 表C.4	相当年齢 表C.5	スタナイン 表C.3
受容言語	39	16		14-18 ± 2		平均的	7:5	
表出言語	65	9		8-10 ± 1		低い	2:7	
読み書き	14	14		13-15 ± 1		平均的	4:10	
コミュニケーション	合計	39	81	74-88 ± 7	10	やや低い		3
身辺自立	64	14		12-16 ± 2		平均的	4:10	
家事	20	17		15-19 ± 2		平均的	6:7	
地域生活	25	15		14-16 ± 1		平均的	4:11	
日常生活スキル	合計	46	100	94-106 ± 6	50	平均的		5
対人関係	36	10		8-12 ± 2		やや低い	2:3	
遊びと余暇	43	14		12-16 ± 2		平均的	5:2	
コーピングスキル	24	14		13-15 ± 1		平均的	4:9	
社会性	合計	38	83	76-90 ± 7	13	やや低い		3
粗大運動	75	12		9-15 ± 3		やや低い	4:7	
微細運動	63	16		14-18 ± 2		平均的	5:9	
運動スキル	合計	28	92	79-105 ± 13	30	平均的		4

強み(S)と弱み(W)

得点-中央値	S / W
2	S
-5	W
0	—
-6.5	—
-1	—
2	S
0	—
12.5	S
-4	W
0	—
0	—
-4.5	—
-2	W
2	S
4.5	—

領域標準得点の合計 =

356				
標準得点 表B.2	90% 信頼区間 表C.2	パーセンタイル 順位 表C.3	適応水準 表C.4	スタナイン 表C.3
88	82-94 ± 6	21	平均的	3

適応行動総合点

中央値の計算方法については、
マニュアルの第3章を参照する

領域の強み(S)と弱み(W)の基準

S = 領域標準得点
-中央値 ≥ 10
W = 領域標準得点
-中央値 ≤ -10

下位領域の強み(S)と弱み(W)の基準

S = v評価点
-中央値 ≥ 2
W = v評価点
-中央値 ≤ -2

	粗点	v評価点 表B.3	90% 信頼区間 表C.6	不適応水準 表C.7
不適応行動指標	1	13	11-15 ± 2	平均的
内在化問題	0	14	13-15 ± 1	平均的
外在化問題	1	15	13-17 ± 2	平均的

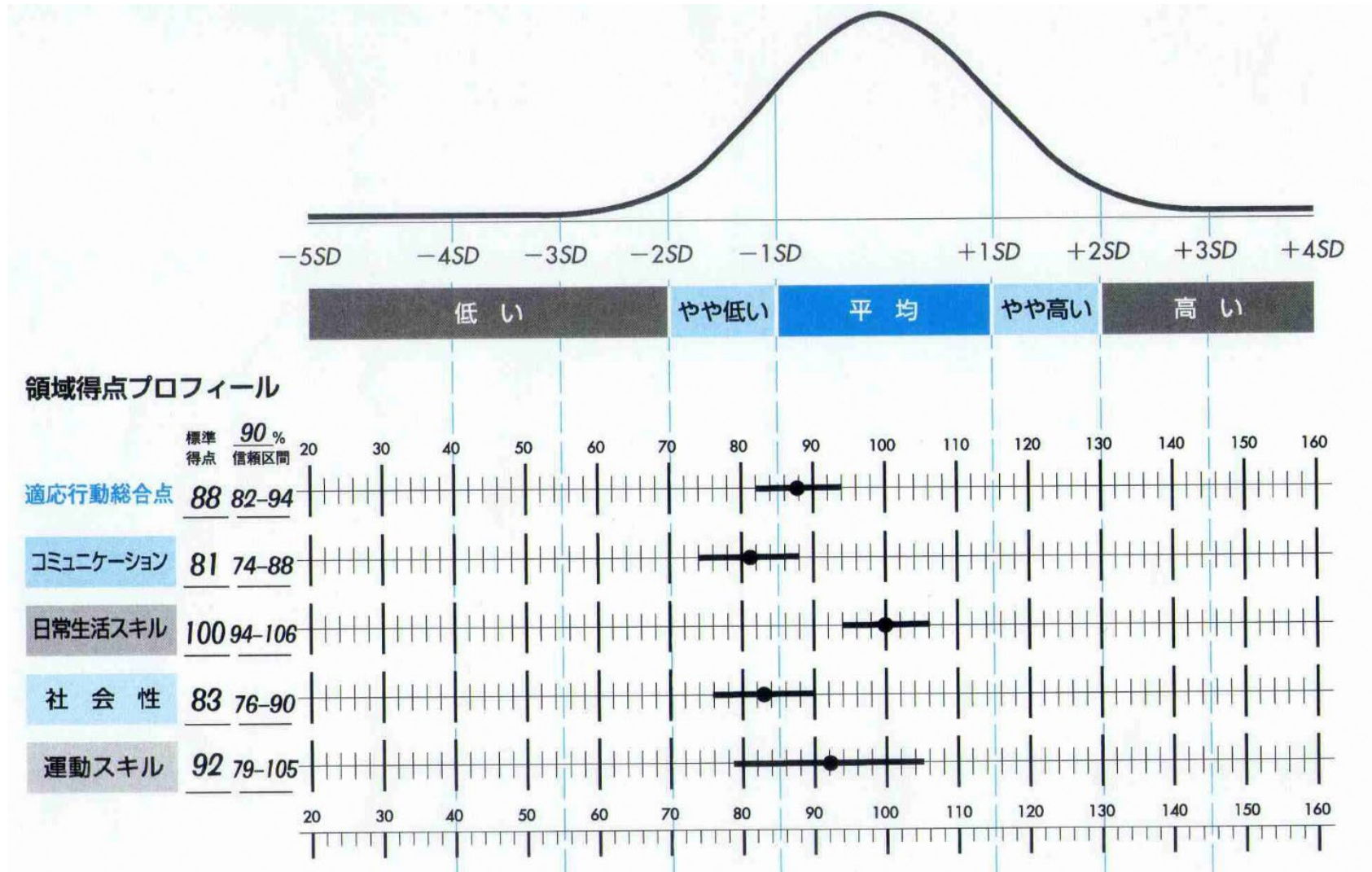
不適応行動重要事項

2点か1点の場合、項目番号を○で囲み、S(強度)かM(中等度)を○で囲む

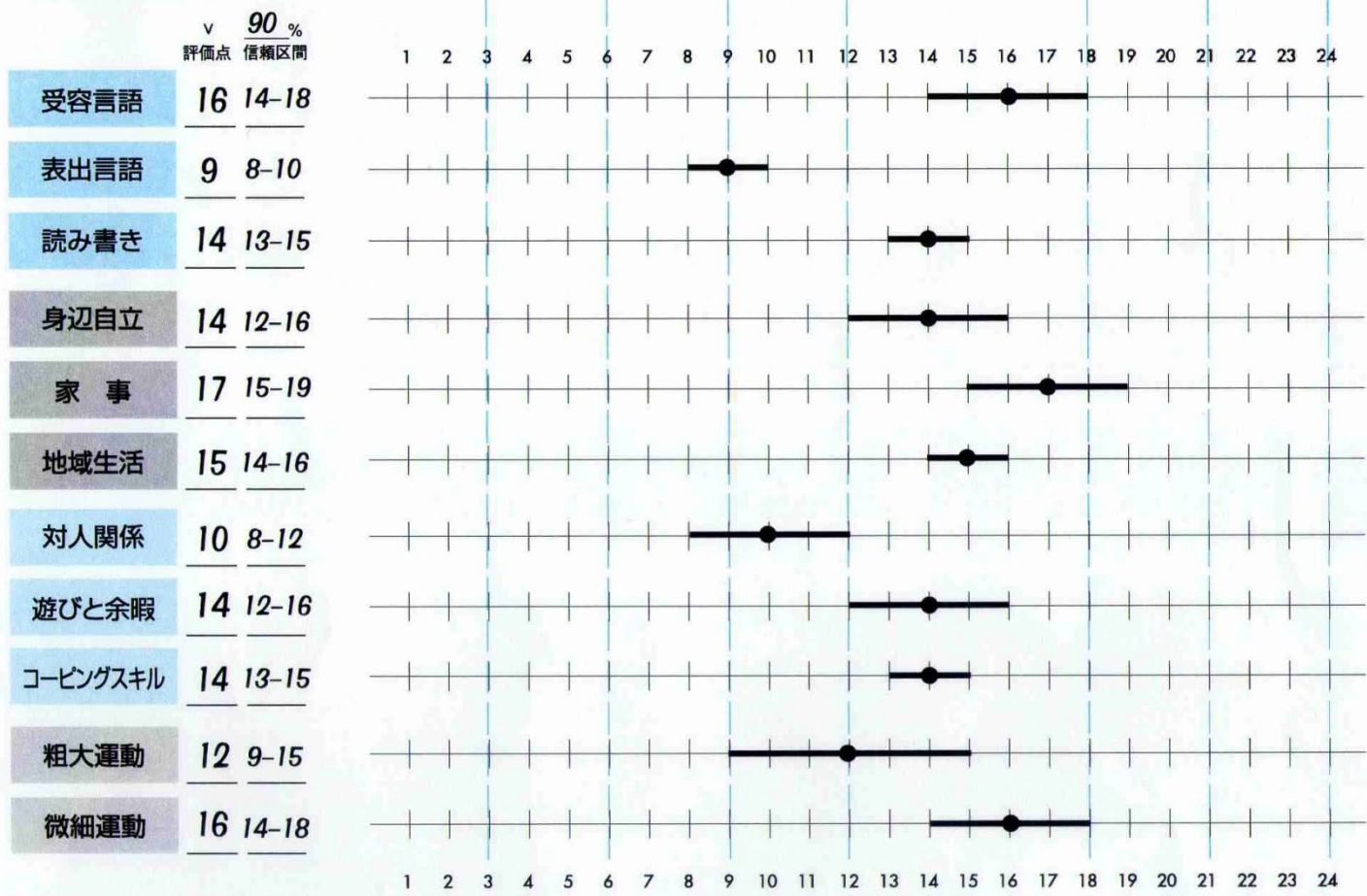
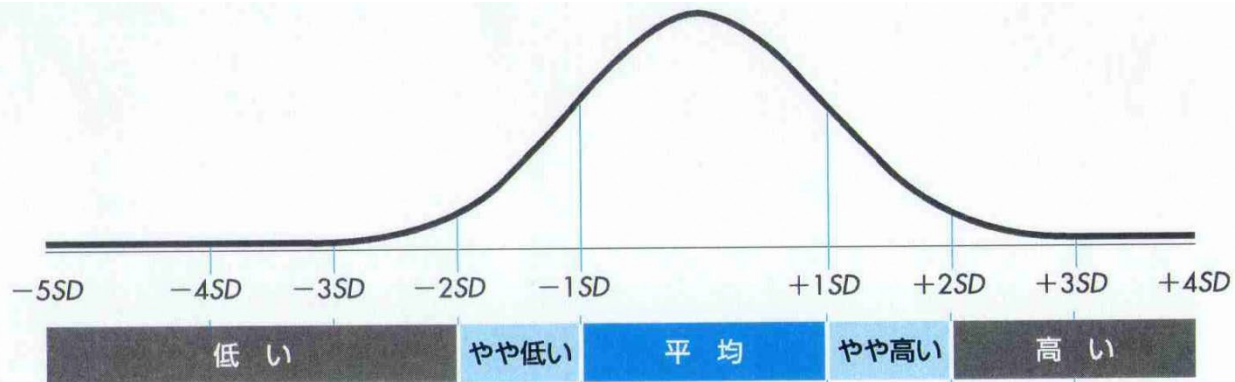
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

日本文化科学社「日本版Vineland-II
適応行動尺度」マニュアル、
43ページより転載
日本文化科学社より許可を得て転載

Vineland-IIの結果の図



日本文化科学社「日本版
Vineland-II適応行動尺度」
マニュアル、
47ページより一部転載
日本文化科学社より許可を
得て転載



日本文化科学社「日本版
Vineland-II適応行動尺度」
マニュアル、
47ページより改変転載
日本文化科学社より許可を
得て転載

項目は具体的で、短期の支援目標にもできる

日常生活スキル領域		2= 通常または習慣的にしている 1= 時々あるいは部分的にしている 0= まったくしていない DK= 不明 N/O=機会なし				チェック欄
: 飲食 : 排泄 : 衣服の着脱 : 入浴 : 身だしなみ : 衛生						
身 辺 自 立	24				2 1 0	DK
	25				2 1 0	DK
	5, 6 → 26				2 1 0	DK
	27				2 1 0	DK
	28				2 1 0	DK
	29				2 1 0	DK
	30				2 1 0	DK
	31				2 1 0	DK
	32				2 1 0	DK
	33				2 1 0	DK

日本文化科学社「日本版
Vineland-II適応行動尺度」
記録用紙、
11ページより改変転載
日本文化科学社より許可を
得て転載

結果の見方

1. 全般的な適応機能を見る（IQと比較して見る）

2. 適応行動領域におけるパフォーマンスを見る

3. 下位領域におけるパフォーマンスを見る

4. 領域標準得点のパターンや下位領域のv評価点のパターンを評価し、強みと弱みを見る

5. プロファイルの凹凸と実際の行動を関連して考える。

6. 不適応行動について考える。

• 支援においては
各項目を見ていく
ことが
重要！！

Vineland-IIから支援へ 目標を立てる時の注意点

- 知的能力や発達特性、環境を踏まえながら、結果を総合的に考える
- 項目のうち、部分的にできている、時々するという評価のある「1」の項目について短期目標を立てると無理がない。
- 優先順位をつける（一度に多くの目標を立てない）。

Vineland-IIから支援へ

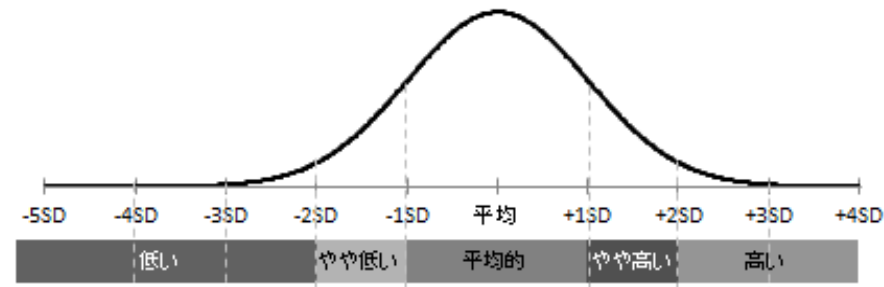
- 架空事例: 11歳男児

WISC-IV

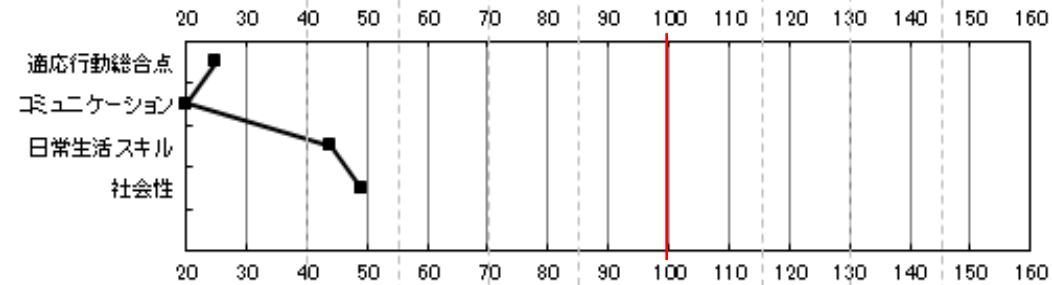
FIQ:97

Vineland-II

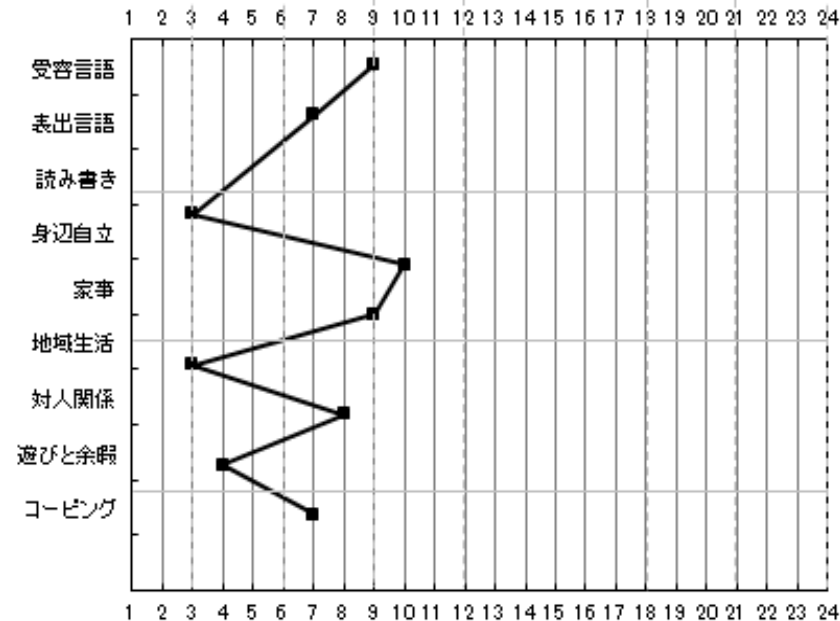
適応行動総合点: 25



領域標準得点



V評価点



身近自立の下位領域から短期目標を立てるとすると、部分的にできている「1」の項目で目標を作ると無理がない。

身近自立(続き)	◆ 31		2 1 0	DK
	☁ 32		② 1 0	DK
	☁ 33		② 1 0	DK
	◆ 34		② 1 0	DK
	7+→ ✂ 35		② 1 0	DK
	† 36		2 ① 0	DK
	◆ 37		2 1 ①	DK
	☁ 38		2 1 ①	DK
	◆ 39		2 1 ①	DK
	◆ 40		2 1 0	DK
	◆ 41		N/O	
	◆ 42		2 1 ①	DK
	◆ 43		2 1 0	DK
		N/O		

日本文化科学社「日本版
Vineland-II適応行動尺度」
記録用紙、
11ページより改変転載
日本文化科学社より許可を
得て転載

目標の例

■支援目標←

説明をすることへの支援

説明も見たことや聞いたこと、触ったこと等具体的にポイントを書いて、整理してから話すことも良いと思います。また、その時の状況をイラストに描きながら話をすることも有効だと思います。←

読み書きはタブレットやパソコンで代用する ←

漢字を書くことに難しさがあるので、タブレットやパソコンで代用できるとよいでしょう。家庭だけでなく学校とも相談し、こうした機器を積極的に利用し書字の苦手さによる不利益を小さくできるとよいと思います。←

気候に合わせて適切な衣服を選択する

気温と天気に合わせて服の枚数と袖の長さなどを具体的にイラストや文字などを活用して教えていくと良いと思います。外出時に天気などの情報も調べるような習慣を教えることも重要です。←

他の人が喜ぶことをする、距離を保つ

漫画風のイラストや文章で、適応的かつ周りの人が好ましいと思うような行動を教えていきましょう。←

←

Vineland-II適応行動尺度のまとめ

- セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など環境におけるニーズを自己調整するスキルである適応行動を調べることでできる検査。
適応行動総合点は、ウェクスラー系知能検査のIQと比較が可能である。
- 評価対象：知的障害、発達障害、精神障害、身体障害など制限がなく、
適用年齢は0～92歳と幅広い。
- 回答者：親や養育者など対象者をよく知る者
- 検査方式：**半構造化面接**、実施時間：約20～60分
- 結果から、適応行動の全体的な水準から求められる他、領域標準得点、下位領域のv評価点、適応水準、強みと弱みなどが求められる。
- 適応行動以外に**不適応行動**についても評価できる。
- 結果から総合的に考えて、支援目標を考えていくことができるが、特に項目から短期の支援目標を効果的に立てることができる。

参考文献

- 監修:辻井正次・村上 隆 作成:黒田美保・伊藤大幸・染木史緒・萩原 拓。「日本版Vineland-II適応行動尺度」日本文化科学社.
- 黒田美保編著「ハンディシリーズ:これからの発達障害のアセスメント～支援の一步となるために」金子書房.
- 辻井正次(監修)明翫光宜(編集)「発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン」金子書房.